

第二に、両者間の学問に対する態度の違いをどのように位置づけるか、という問題も本質的である。フランチェスコの主張の根本には「所有の放棄」があったが、彼においては、学問もまた放棄の対象とされていた。フランチェスコの神秘経験——らい者への接物が歓喜に変わったこと、聖痕の付与など——は、学問を放棄し、もっぱら貧困生活を実践することによって苦悩が歓喜に変わり新たな世界が拓かれる、という経験であった。それは、「言葉によらず範型 *exemplar* を生きる」ことによって獲得される実践的神秘経験なのであり、そこには、学問も、さらには、苦行・瞑想も入り込む余地はなかったのである。しかるに、彼の死後、教団は、托鉢・奉仕と並んで学問を自らの内に採り入れ急速に変質して行く。フランチェスコ会最初の哲学者ボナヴェントゥラは、33歳の若さでパリ大学の教壇に立ったし、ドゥンス・スコトゥスもまた長年オックスフォードの教師を勤めた。とするなら、かかる「学問の人」の神秘思想をフランチェスコの神秘経験の延長上で捉えることは、果たして正当であろうか。

われわれは、ボナヴェントゥラを、「フランチェスコの人格の伝統と当時の——特にパリ大学をめぐる——学的・政治的要請の狭間に立った人」と見ることもできよう。（そう理解するなら、ボナヴェントゥラの思想はたしかにフランチェスコの延長線上に見えて来る。）また、ドゥンス・スコトゥスにおける「アリストテレスの・ドミニコ会的神学の拒否」の中にフランチェスコその人の直接性の影響を認めることも可能かも知れない。しかし、いずれにしてもこの「学問と神秘思想」の問題の根底には「言語と神秘思想」の問題が横たわっている。フランチェスコ会の神秘思想の性格は、「神秘経験において言語が果たす役割」という観点からこれらを見直して見るときに、新たな相貌の下に現れるのではあるまいか。

意見

経験と解釈

加藤 武

### 1 「神秘」という用語

長倉久子氏は、E.ジルソンを援用しつつ、「神秘主義とは、本来理性によってとは

らえられない、従って言葉によっては表現できない神、ないしは実在の根源との神秘的な一致」をさすたとされる。もとよりそれは正しい。しかし言葉で捉らえられない *res* が、いかにして言語化されるのか、それは「語りえない； *indicibilis*」事態なのか、それとも「語り尽くせない； *ineffabilis*」事態なのかを、どこかで明瞭に区別し定義しておかなければならないのではないか。

八木雄二氏はスコトゥスの場合、神秘という言葉に言及した箇所が見当たらないことから、神秘という言葉に拘泥する必要はない、とした上で、自然的と、超自然的という区別（これについては、八木氏の『スコトゥスの存在理解』、創文社、第2節に詳しい。）を手掛かりとして、カリタスがあらわれる行為の場に照準をあわせて神秘を追跡しておられる。しかし、このような場を、「神秘」という言葉によって表わすことが、はたしてふさわしいかどうか、さらに「励ましになる」とされる場合、どのような行為の場を、見体的に絵として思い描いておられるのか、あるいは誤解を恐れずにいえば、それは、せいぜい、不可知の領域に属するに留まるのではないか、こうした疑問が禁じえない。しかし、翻って考えてみると、宮本久雄氏が討議の場で指摘されたように、それは、神秘の聖域を守るための、スコトゥスに固有な露払いとして、むしろ積極的・肯定的な見方もなりたつのかもかもしれない。いかがであろうか。

いずれにせよ、お二人の議論の前提において、神秘という用語をどう定義するかに、今すこしく「拘泥」することも意義なしとしないのではないか。

## 2 経験と体系

今回のお二人の報告において相重なる著しい特色がある。それはボナヴェントゥーラもスコトゥスも、いずれもフランシスコの経験に共通の源流をもっていることである。たしかにボナヴェントゥーラは、はっきり述べている。

「さて、まさにこのことこそ、幸いなフランシスコに示されたのでした。『魂の神への道程』、長倉久子訳、創文社、82頁）

長倉氏によると、ボナヴェントゥーラはこの経験（*experientia*）を『道程』において、体系化したのであり、それをアウグスティヌスに遡る範型論によって思想的に表現した。また、八木氏によると、スコトゥスは「喜ばしく」なされる行為の経験を「聖フランシスコが、聖フランシスコ会の伝えるところを、かれの神学の最上のことから示そうとした」、といわれる。ただし「これは想像である」、と添えておら

れるが、

ひとは経験を思想として体系化し、これを言語にまで結晶する。しかし、長倉氏もことわっておられるように、「体験」(＝経験)は「根本的に言語表現を拒否する」。経験を言語という曲面に連続写像として投影したとき、そこにブレが生じ、歪みが生ずる。このたびシンポジウムの司会の労をとられた西洋中世史家、坂口昂吉氏は、「このように罪の苦しみの陰すらもないようなボナヴェントゥーラは、その師アッシジのフランシスコが苦悩と憔悴の末に克ちえた完全な贖罪の証しである聖痕跡と、無関係であるかの如き印象」(『中世キリスト教文化紀行』、南窓社、160頁)、を禁ずることができなかったが、その疑念は、やがてボナヴェントゥーラ、三十四歳のある日の『主日説教』を読んで氷解した、と述べておられるのであるが、では、経験と体系はどこで接するのであろうか。なにが両者を結び付けるのであろうか。

### 3 経験と解釈

あれはいつのことであったか、東京カテドラルの聖堂で、メンアンの「アッシジの聖フランシスコ」を小沢征聖の指揮で聴いた。音楽の世界からおおよそ程遠い耳の持ち主である私が、どうしたことか、ほとんど神秘経験に近い！と思われるくらいの、忘れがたい印象をうけたのである。あのような音楽によるエクスタシスは、後にも先にもない。この度、宿題の「意見」をしたためようとしているうちに、いまごろになって、ひょいと気づいたのは、あの演奏会よりも少し前に同じ聖堂で、フランス人のA神父の葬送のミサがあり、隅っこに座っていたのを、すっかり忘れていたことである。A神父は亡くなられる何年前か前に、ふと「子供のころ、イエスの声を聞きたい、声はどこにあるのか、雲の上だろうか、と思った。グレゴリオ聖歌を雨のように降らせたい」と、ぼつりといわれた。独り言のようであった、と、ある人から聞いた、色彩を喚起する合唱とオーケストラに聴き入りながら、いつしか師のことばを、どこかで重ねあわせていたのかもしれない。音楽の経験がごく個人的な記憶とどこかで繋がっていることを、M. ブルーストも語っている。

神秘経験も、これに似たところがあるのではないか。神秘経験の理解とは経験をそっくり再現するのではないだろう。それは錯覚でしかない。われわれは蜜蜂のように、複数のテキストを集めてくる。多をつなぎあわせ、それを一に向かい、一に参与して、多を創造的に「解釈する」のである。これもまた、いまひとつの経験ではなからうか。

経験の解釈ということを、お二人はどのように捉らえておられるのであろうか、伺いたい。

\* \* \*

最後に、経験が、ここヨーロッパでは、いずれも「個」の舞台に乗せられ、演出されていることが、地中海世界のアウグスティヌスなどと、大きく異なる点ではないか、と思われるが、神秘の社会学的背景・神学的地平の巨きな変容については、すでに討議において、水落健治氏と谷隆一郎氏が興味深い発言をしておられたので、ここでは繰り返さない。

終わりに、われわれに大きな示唆と啓発を与えられたことを記して、報告をされたお二人のご労苦に心から御礼申し上げる。